

## 国内経済情勢

### 概 観

輸出数量は伸び悩み気味ながら、個人消費が堅調に推移し、設備投資計画に増額修正の動きもみられるなど、国内民間需要は順調に拡大している。こうした状況下、7月の生産・出荷は増加傾向を持続し、企業の業況感も一段と改善を示している。

8月の商品市況は、年初来騰勢の目立った石油製品、合板に高値修正の動きが前月に続きみられたものの、その他の品目は総じて小幅ながら続伸商状を示した。また卸売物価は、原油など輸入価格の上昇に加え国内需給の堅調を背景に海外高の国内価格への波及が進行したため前月に続き大幅上昇となった。一方、消費者物価(東京)は、季節商品の値下りから前月に比べかなり低下した。

金融面をみると、企業の手許流動性比率は引続き低下し、資金繰り判断にも漸次緩和感の後退がうかがわれる。こうした中で、7月の全国銀行貸出約定平均金利は引続き上昇した。

7月の国際収支をみると、貿易収支が49年6月以来久方ぶりに赤字となり、経常収支、総合収支は赤字幅を拡大した。8月の為替相場は月央以降やや円安となった。

#### 生産・出荷はともに増加

7月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比\*、速報)は、+0.8%と4か月連続の増加となった。一

方出荷(速報)は前月減少のあと+0.8%と再び増加した。この間、生産者製品在庫(速報)は、+1.0%と6か月ぶりに増加し、同在庫率(50年=100)もやや上昇した。

\* 以下増減率は特に断らない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

7月の生産動向を財別、業種別にみると、非耐久消費財は繊維製品等の減産から小幅ながら2か月連続の減少を示したが、耐久消費財がカラーテレビや輸出向け自動車、二輪自動車等を中心に増勢を続けたほか、一般資本財が出荷好調を背景に、また石油製品は原油の入着増からいずれも増加した。一方出荷面では、エアコン、自動車等の耐久消費財や繊維製品等の非耐久消費財が天候不順の影響などからかなり減少した反面、前月落込みを示した一般資本財や生産財は民間設備投資関連機器(化学機械、繊維機械、電子計算機等)や国内向け鋼材、石油化学製品、紙などを中心に再び大幅増加となった。

この間、製品在庫は、耐久消費財が増加したほか、このところ減少傾向にあった石油製品の在庫も生産増などからかなりの回復を示した。

国内需要の動向をみると、7月の公共事業契約額(前年比)は+13.7%と前2か月減少のあとやや持直し、8月の公共事業請負額(前年比)も+18.4%と前月をかなり上回る伸びとなった。

設備投資動向については、7月の機械受注額(船舶・電力を除く民需)は製造業からの受注好伸を主因に+7.5%と前月に続き増加した。8月時

点調査の日本銀行「主要企業短期経済観測」によると、54年度の設備投資計画(全産業)は前年度比+12.0%と前回調査(5月)に比し上方修正され、特に製造業では前年度比+18.7%とかなり高い伸びが見込まれている。

消費面では、7月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は、天候不順の影響から夏物衣料、エアコン等季節商品の売行きが伸び悩んだため+6.5%と前月(+8.6%)に比べ伸び率が低下したが、8月に入ってから比較的好調に推移した模様である。また8月の乗用車新車登録台数(前年比、速報)も+10.1%と前2ヵ月伸び悩みのあとかなり持直した。

雇用情勢をみると、7月の完全失業率は2.26%と再び上昇したが、有効求人倍率は製造業の求人増などから0.73倍と小幅ながら引続き改善した。

なお上記「短観」によると、54年度上期の企業収益(製造業、経常利益)は、売上の好伸を背景に前回調査(+11.8%の増益)比大幅に上方修正され、+27.5%の増益が見込まれている。こうした事情を反映して企業の業況判断も一段と改善を示した。

#### 卸売物価は騰勢持続

8月の商品市況をみると、年初来騰勢の目立った石油製品、合板に品薄感の後退から高値修正の動きが前月に続きみられたものの、石油化学(塩ビ、高圧ポリエチレン等)、紙、製材、綿糸などでは小幅ながら続伸商状を示した。

一方卸売物価は、+1.6%と前月に続き大幅上昇を示し、前年比上昇率は+10.9%と50年1月以来4年7ヵ月ぶりで2けたに達した。品目別には、高値原油の入着などから輸入品が引続き大幅に上昇したうえ、国内品も国内需給の堅調を背景と

して石油・化学製品、紙・パ製品などを中心に原料高の製品価格への波及が進行したため続伸した。

8月の消費者物価(東京、速報)は野菜・果物や夏物衣料の値下りから-1.3%と大幅低下を示し、前年比上昇率も+2.7%と前月(+4.0%)をかなり下回った。

#### 企業金融の緩和感は漸次後退

8月の金融市場をみると、銀行券は3,638億円の還収超(前年同4,303億円)となり、月中平均発行高(前年比)は6~7月伸び悩みのあと+11.6%とやや伸びを高めた。一方財政資金は、一般財政の払超幅が税収の好伸から前年をかなり下回ったうえ、国債発行額も前年比大幅増加をみたため、9,054億円の揚超と前年(同4,415億円)に比し揚超幅をかなり拡大した。この結果、月中の資金不足額は5,718億円(前年同711億円)となり、市場地合いは通月引締まり気味に推移した。

こうした状況を映じて、コールレート(無条件物、中心レート)は月中+0.1875%の上昇(月末6.75%)となったが、手形売買レート(2山越)は10~11月の季節的資金余剰期を控え通月横ばいで推移した(月末7.0%)。

企業の資金需要は増加運転資金を中心にこのところ底固さを加えてきており、前記「短観」でみても企業の手許流動性比率は引続き低下し、資金繰り判断にも漸次緩和感の後退がうかがわれる。こうした状況の下で、7月の全国銀行貸出約定平均金利は+0.104%と前月(+0.101%)に続き上昇した。この間、7月のマネーサプライ(M<sub>2</sub>+CD平残、前年比)は+11.9%とほぼ前月(+11.8%)並みの伸びとなった。

8月の公社債市況は、月央以降都地銀筋の売却

増加を映じて小幅軟化を示した。一方株式市況は、根強い物色人気に支えられて上伸歩調をたどった(東証指数月末454.11、月中+9.10)。

#### 貿易収支が赤字に転化

7月の国際収支は、緊急輸入の増加もあって貿易収支(季節調整後)が49年6月以来久方ぶりに赤字となり(204百万ドル、前月773百万ドルの黒字)、貿易収支季節調整後の経常収支は1,279百万ドルの大幅赤字となった(前月同195百万ドル)。この結果、総合収支も長期資本収支の流出超幅が対日債券投資の増加などから一段と縮小したにもかかわらず1,002百万ドルの赤字と前月(同372百万ドル)に比し赤字幅を拡大した。

7月の輸出(通関、ドルベース)は、-0.6%と前2ヵ月増加のあと再び減少し、数量ベースでも3ヵ月ぶりに前年水準を下回った(前年同月比 -0.9

%、前月同 +2.1%)。品目別(ドルベース)には、自動車、二輪自動車が米国向けを中心に増勢を続けたものの、前月大幅増加の船舶が反動減を示したほか、鉄鋼、合繊糸なども引続き減少した。

一方輸入(通関、ドルベース)は、+4.9%と前月に続きかなり増加し、数量ベースでも高水準の伸びを続けた(前年同月比+14.5%、前月+20.9%)。品目別(ドルベース)には、原油が価格の大幅上昇に加え数量の持直しもあって著増し、鉄鉱石、木材等もかなりの増加を示したが、繊維原料(羊毛、綿花)、非鉄金属鉱等は前月に続き減少した。

8月のインターバンク米ドル直物相場は月央以降円安歩調をたどり、220円5銭で越月した(月中3円15銭の円安)。

(昭和54年9月11日)